

若越郷土研究

54の1

特別寄稿

粟屋越中守勝久と国吉籠城戦

美浜町教育委員会
若狭国吉城歴史資料館

大野 康弘

一、武田氏の内紛

若狭粟屋氏は、若狭武田氏の重臣で、逸見氏、内藤氏らと並び「武田四老」の一人に数えられる。その先祖は武田氏（源氏）に通じる安田氏で、常陸国粟屋庄に土着して粟屋氏を名乗る。武田氏に従って甲斐国、安芸国を経て、若狭国入りした。当主は代々、右京亮または越中守を名乗る。若狭国における粟屋氏の所領は、主に遠敷郡に持っていたが、天文七年（一五三八）に粟屋右京亮元隆が主家に謀反を起こして所領を取り上げられている。その後、弘治二年（一五五六）に突然三方郡

国吉城主として粟屋越中守勝久が現れるが、この間の所領の変遷や元隆から勝久への相続、また血縁関係については資料がなく、不明な点が多い。

その頃、主家である若狭武田氏は、当主信豊と嫡子義統の間で家督に関する内紛を繰り返し、永禄元年（一五五八）、争いとなって信豊は近江に逃れ、義統が家督を継承した。勝久は、信豊が推す重信派（義統弟）であり、義統の家督を認めず、永禄四年（一五六二）、大飯郡の逸見駿河守と共闘し、義統に叛旗を翻した。

武田義統は、軍勢を大飯郡に差し向け、逸見駿河守の碎導山城を包囲し、これを降した。逃れた逸見駿河守は、高浜城を築いて再び謀反を起こすが、粟屋勝久に対しては、永禄六年（一五六三）、越前朝倉氏が若越国境を越えて国吉城に迫った。これは、若狭武田氏と越前朝倉氏が縁戚関係にあり、大飯郡を攻める武田氏を後方から支援し、かつ、粟屋氏を牽制するための軍事行動である。

二、「若州三瀨郡佐柿国吉籠城記」等に見る国吉籠城戦

江戸時代の初め、三方郡佐田の田辺宗徳入道（半太夫安次）は、自らが若かりし頃の体験を軍記物にまとめ、小浜藩主に献上した。『国吉城之記』と題するこの軍記物は、その後、多くの人々が写本し、いわゆる『国吉籠城記』諸本（以下『籠城記』等）として世に広まった。

この『籠城記』等は、基本は朝倉氏と粟屋氏の国吉城における攻防戦が年次ごとにまとめられ、田辺半太夫が味方した粟屋方の目線で記されている。所々に様々なエピソードが差し挟まれているが、本によってエピソードが追加されたり、削除されたりはあるものの、国吉籠城戦の概略は知ることができる。

この中で語られる国吉城の守りは、
・城の三方は、手を立てたような険しい斜面で、尾根筋から距離がある
・城の北西には「機織池」が満々と水を湛えている
・池の水際には乱杭、逆茂木がたくさん打ち込まれている

・大手口は最初平坦、九十九折の細道を数十町登らなければならない
 ・搦手口（椿峠）の街道は細く、両脇を險しい山に挟まれている

・城の周囲には大木古木が生い茂り、矢玉の障害になつている

と、詳細な地形と縄張りの説明があるが、これらは現在の国吉城址の地形からも想像が可能であり、実際に現地を見て書かれたものと考えられる。

永祿六年（一五六三）、越前朝倉氏の軍勢が若狭国に侵入する。記述を要約すると「越前朝倉氏は、若狭国を我が物とするため、越前天筒山城の朝倉太郎左衛門と半田又七が一干騎を率いて出陣した」と記す。『籠城記』等は、粟屋方の記録であり、粟屋勝久を「朝倉氏の侵攻から国を守った英雄」として記されている。が、先述のように、勝久自身が主家武田氏に叛旗を翻したのであり、朝倉氏は武田氏との縁戚関係から援軍したにすぎず、内容と事実には大きな違いがある。

朝倉氏の侵攻に対し、「粟屋勝久は近隣に陣触れして迎え撃つ準備を進めた」とあり、

田辺半太夫をはじめ馳せ参じた各地の地侍の氏名を列挙し、その他有名無名の参陣した地侍二百、百姓ほか六百余が集まつたとある。

一見すると、千対八百でほぼ互角のようであるが、単位が異なる。朝倉勢は「騎」、つまりは騎馬武者の数であり、それらに従う足軽や荷駄隊を含めれば、さらに多数であつたと考えられる。

『籠城記』等では以降、年々の戦いの様子が記されている。

①永祿六年（一五六三）の戦い

・八月、朝倉勢侵入。粟屋勢、兵三百で街道上に幟旗を立て、堀切と木戸を作り待ち構える。朝倉勢、夜明け前に敦賀を出陣。粟屋勢、早朝の薄暗い中で鉄砲を撃ち、切り込む。朝倉勢、不意打ちに狼狽し、敦賀方面に撤退（討死三人、負傷二人、追撃で討死三十六人）。

・九月、朝倉勢、山上方面より国吉城を攻める。粟屋勢、人夫六〜七百人で城内に大石や古木を積み上げる。朝倉勢、山を六〜七分目まで這い上がったところに、粟屋勢が

大石や古木を投げ落とし、弓、鉄砲を打ち込む。朝倉勢退却（討死三百六十四人）。

②永祿七年（一五六四）の戦い

・九月、朝倉勢、太田芳春寺に着陣。朝倉勢、伏見ヶ嶽（御岳山）の下から立岩の尾根筋に登り、城を見下ろして弓、鉄砲を撃ちながら攻め込む。粟屋勢、弓と鉄砲の名手数人が城の各所に散らばって激しく打ち込む。朝倉勢が狼狽したところに百名ほどが打って出る。朝倉勢、密集して突撃するところを狙われ、八十余人が笹原に倒れ、その後の粟屋勢の切り込みで我先にと逃げ出す（討死七十三人）。粟屋勢、負傷七人、討死三人（うち百姓二人）。

・朝倉勢、体勢を立て直して、坂尻・椿峠方面から再度攻め上がる。粟屋勢、大石を投げ落とし、古木を投げつけ、鉄砲を一斉射撃して防戦。朝倉勢、手持ちの武器を投げ捨てて退却。

・朝倉勢、芳春寺山に付城（中山の付城）を構え、山東地区一帯で狼藉を働く。

③ 永録八年（一五六五）の戦い

・中山の付城と芳春寺、太田村周辺に陣取る朝倉勢、山東地区一帯で春から夏に農作物を荒らし回る。八月下旬、兵を増やして大挙して耳庄に侵入し、狼藉を働く。粟屋勢、この様子を国吉城から傍観し、評定を行い夜討作戦を定める。

・九月二十七日夜半、粟屋勢、三方から中山の付城に迫り、忍び込み放火。朝倉勢、城内の火事に驚き狼狽、太田村・芳春寺にいた兵も混乱。粟屋勢、逃げる朝倉勢を追い討ち。朝倉勢、太田川原で踏み止まるも、粟屋勢の勢いに押されて撤退。朝倉勢の討死百七十人、粟屋勢、討ち取った首を太田川原に並べる。粟屋勢の侍五人、百姓三十四人討死、負傷者多数。

・勝久、付城でみつけた朝倉太郎左衛門の歌に感嘆する。

④ 永録九年（一五六六）の戦い

・八月、朝倉勢、佐田駈倉山に付城を構え（駈倉山の付城）、山東、山西の各地で狼藉を働く。神社仏閣を焼き払い、鐘楼などを鋳

粟屋越中守勝久と国吉籠城戦

潰して鉄砲の弾に改鋳。耳庄一帯では、家もまばらに。粟屋勢、この様子を国吉城から傍観し、ただただ悔しがらる。

・朝倉勢、今市に戻り山上方面から腰越坂に登り、国吉城と岩出山を分断。腰越坂から百姓小屋まで攻め上る。粟屋勢、勝久の息子、五右衛門勝家以下二百余人で岩出山砦に立て籠もるが、朝倉勢の進路変更で、岩出山の兵を城に戻す。朝倉勢、腰越坂より国吉城を攻めたて、百姓小屋まで攻め上るが、粟屋勢、城中からの火矢を射かけ小屋が炎上、朝倉勢、周章狼狽のところ、粟屋勢、混乱に乗じて弓衆、鉄砲衆を先頭に打って出て、朝倉勢を谷底へ追い落とす。朝倉勢の討死百三十人。粟屋勢、討死五人（與五八、又蔵、佐田村の百姓三人）、負傷者多数。

⑤ 永録十年（一五六七）の戦い

・八月下旬、佐田駈倉山の付城に陣取る朝倉勢、山東の集落で狼藉を働く。

⑥ 永録十一年（一五六八）の戦い

・四月、朝倉勢、坂尻から越前坂を抜けて気山へ。粟屋勢は朝倉勢侵入に対して、椿峠から攻めてくることを予測し、盾を突き並べて待ち構えたが、朝倉勢は通過。朝倉勢を追撃に出るか評定するも長引き、機会を失う。

・朝倉勢、大倉見城の熊谷氏を攻めた後、進路上の村々に火を付けながら小浜に侵攻。後瀬山城に使者を送り、義統の跡を継いだ武田元明を騙す。元明を同道して越前へ（越前側では保護、若狭側では拉致ととらえている）。帰途、熊谷氏、粟屋氏らに元明の名前で降伏の使者を送る。粟屋勝久、「例え孫八郎殿の敵になろうと、朝倉義景に同心するなど思いもよらぬこと」と徹底交戦の構え。

⑦ 元亀元年（一五七〇）以降のこと

・織田信長勢、四月二十日京都出陣、和邇、二十一日田中、二十二日熊川松宮玄蕃、二十三日柿御逗留（以上『信長公記』）。

・勝久、城内を掃き清め、倉見峠まで出迎え

て共に入城。褒め言葉をいただき、地侍の
拜謁を許される。信長、城に登って城下町
整備を指示。

・二十五日、織田勢国吉城を出陣。天筒山を
攻め落とし、金ヶ崎は降伏開城。浅井長政
の裏切りの報をうけて朽木越えて京都に撤
退、木下藤吉郎の殿戦。

・朝倉氏・浅井氏の滅亡（天正元年・一五七
三年八月）。

以上のように、永祿六年から始まる一連の
攻防について、粟屋勢が大勝した様子を中心
に、朝倉勢の狼藉で領民までが苦しんだ激し
い戦いであったこと、元龜元年に織田信長を
迎え入れ、天正元年に織田信長と共に朝倉氏
を亡ぼしたことが記されている。

粟屋方の目録で記されているため、必要以
上に朝倉氏を貶めている感も否めないが、朝
倉氏側の視点でみる国吉籠城戦ははたしてど
うだったのであろうか。

三、籠城記に記されない戦い・記録

～朝倉方の記録・地元の伝承から～

朝倉方の記録では、国吉籠城戦については
ほとんど触れられていない。逆に、触れてい
ないことで、『籠城記』等にもみられる粟屋勢
の優勢を物語るともいえる。

そのかわり、朝倉方には元龜元年以降の戦
いと、その戦いを優勢に進めたことを伝える
記録が残る。また、地域で伝承されている話
しには、当時、粟屋勢が行った行為や、戦い
に破れたことを伝えるものがある。これらの
共通点は、いずれも『籠城記』等に記載がな
い、粟屋勢にとって不利になることを伝えて
いる点である。

① 太田芳春寺の処分

・朝倉勢が本陣を構えた、芳春寺の寺伝によ
れば、粟屋勝久が朝倉勢撤退後の芳春寺に
対して、僧侶達の首を刎ねて晒したうえ、
寺領を没収したという話が伝わっている。

② 元龜元年（一五七〇）の早瀬侵攻

・『若狭郡県誌』に、「早瀬飯盛山に粟屋勝久

が構えた塁あり。隠居所と伝承」の記載が
あり、出城の存在が伝えられている。

・早瀬地区の伝承によれば、飯盛山に粟屋氏
の出城（狼煙台）があり、朝倉勢に攻めら
れて落城し、その時討ち死にした粟屋方の
兵六人を祭ったものが起源といわれる六社
権現が集落内にあり、飯盛山麓には彼らの
屋敷地（デンシヤ屋敷）の跡があったとい
う（松金勝『国吉籠城軍記と敦賀・美浜』）。

・『真史』資料編に収録される「元龜元年九
月二十二日付服部運栄書状」、同年十一月
二十九日付景初感状」に、同年九月十九日
に早瀬で合戦があり、朝倉勢が「早瀬城」
を攻め落としたことを記す（大森宏『戦国
の若狭』）。

③ 天正元年（一五七三）の若狭侵攻

・『朝倉始末記』によれば、三月、朝倉義景
自ら敦賀に着陣、一部は若狭国に侵入し、
中山の付城を再構して国吉城に侵攻し、周
辺を荒らしたことを記す。

・『信長公記』によれば、「同年八月十三日、
落城した朝倉方の城九箇所と」粟屋越中守

差向い候付城共十箇所退散」とあり、朝倉勢の付城が壊されたことがわかる。

四、語り継がれた伝説

↳ 読み物としての籠城記

『籠城記』等は、実際に粟屋方として戦いに参加した地侍によって記された軍記である。多分に味方側に偏った内容ではあるが、ある程度事実に基づいていることは確かである。ただし、その後多くの人が写本し、読み物として成立していく中で、史実もあればフィクションもあり、他の軍記を引用するなどして完成したものである。

ここに挙げるエピソードは、直接籠城戦に関係しないが、『籠城記』等に記されたものである。本によって追加されたり、削除されたりしているのですが、どこまでが国吉城を舞台としたエピソードなのかはわからない。

① 朝倉太郎左衛門の歌

・永禄八年（一五六五）、中山の付城に夜討ちをかけて大勝した後、粟屋勢は付城に残

された兵糧や武器を国吉城に運ぶ。その際、『武士の鎧の袖を片敷きて枕に近き初雁の声（九月二日 朝倉太郎左衛門）』と書かれた短冊をみつけた勝久は、感嘆の声をあげる。

この歌は、福井県内ではこれまで朝倉氏の歌として認識されてきた。ところが、別の県では、上杉謙信の歌として知られている。

越中・能登へ進出した上杉謙信が、天正元年（一五七三）に越中国魚津城（富山県）に来た時に詠んだ歌として『北越軍談』や『北越軍記』に記されおり、城跡には歌碑が立っている。

また、長野県長野市豊野町川谷日影に伝わる民話「陣場山」には、上杉謙信が武田信玄と戦うため越後を出陣し、善光寺平を望む白坂峠に陣を張り、近くの日影川谷の氏神に戦勝祈願した時に謙信が詠んだ

『武士の鎧の袖をかきたして枕に近き初雁の声』

というよく似た歌（「かたしきて」の誤伝か）が伝わっていることが判った。

これらの発見によって、朝倉太郎左衛門の歌のエピソードは、『北越軍談』や『北越軍記』からの引用の可能性を考えなければならなくなった。しかしながら、『籠城記』等にしても、『北越軍記』等にしても、書かれたのはいずれも江戸時代で、謙信や太郎左衛門の生の声を反映したものではない。だから、同時代に近い時期に成立した記録がみつからない限り、この歌が誰のものなのかを確認することは難しい。

② 糠の実と田辺玄蕃の水論と田辺玄蕃の謀反露見

・永禄九年（一五六六）の頃、朝倉太郎左衛門は度重なる国吉城攻めの失敗から、内通者を作って内から城を落とす方法を考え、野坂権守に命じて木野村の田辺玄蕃を調略。その数年前、麻生に糠の実二郎という長者がおり、田辺玄蕃と水争いとなる。言う事を聞かない二郎を玄蕃が闇討ちする。二郎の妻は逃げて野坂家に奉公しており、玄蕃の調略を知る。

・二郎の妻は武田の殿様にこのことを報せ、

褒美をもらう。玄蕃は捕らえられ、白状して斬首、仲間の沼田九郎も栗屋勝久の配下に討ち取られる。

このエピソードも実際にあった話かどうかは定かではない。二郎の妻はなぜ栗屋勝久ではなく武田の殿様に報せたのか。そして、なぜ勝久の手ではなく、武田の殿様の手で処断されたのかなど、勝久は武田家と切れ、武田と朝倉が結んでいる当時の情勢から考えられない。若狭国（武田家）を朝倉の侵略から守った英雄という勝久のイメージを強めるために追加されたフィクションの可能性が高い。

③ 寺社の鐘を鋳潰して鉄砲の弾に

・永録九年（一五六六）八月、朝倉勢が佐田に押し寄せ、狼藉を働く。

・山東、耳庄の神社仏閣を打ち壊し、釣鐘は坂尻浜に引き出して、鋳潰して鉄砲弾にする。いくつかは越前に持ち帰り、市に売りに出した。

敵方の農地を荒らして収穫を減らす、ある

いは自らの兵糧とすることや、村々から略奪し、民衆も奴隸として連れ去ることは、当時の戦場ではよくみられることであり、戦勝の証でもある。この年だけではなく、朝倉勢はほぼ毎年山東や耳庄を荒らしていたと『籠城記』等を伝えている。寺社打ち壊しや釣鐘のエピソードは永禄九年のみに記される。

このほか、『籠城記』等に記されていないが、国吉城にまつわる伝説として、国吉城の水は、新庄から竹筒を繋いで御岳山を通して引いていたとか、籠城の際、水が豊富にあると思わせるため、白米で馬の体を洗ったという、他の戦国軍記にもよく引用されているエピソードも伝わっている。

五、国吉籠城戦の真実 ～戦国軍記の世界～

戦国軍記は、当時の戦場の様子をリアルに記し、また、戦場だけでなく、戦前、戦後の描写、始末の様子や、戦場以外のエピソードをふんだんに盛り込み、読む者を戦国の情景に誘う。ただし、それは読み物としておもしろくするため、数少ない史実にフィクション

を織り交ぜ、誇大に話しを大きくしているからに他ならない。また、他の軍記物から引用して再構成している場合も多い。そして、主人公を立派にみせるため、敵方を貶め、主人公に都合の悪いことは削除する。

『籠城記』等は、まさにその戦国軍記の内容構成を証明している。戦場の様子は非常にリアルで、かつ、朝倉勢の乱暴狼藉で三方郡が疲弊した様子や、朝倉氏滅亡からその後の栗屋氏や国吉城の様子も盛り込んでいる。そして、栗屋勝久を文武両道の名将、若狭国を守った英雄として称え、それを証明するエピソードで脚色している。また、負け戦は記さない、都合の悪いことは記さないという情報操作もみられる。討ち取った首の数なども誇大表現している可能性がある。

だからといって『籠城記』等の全てを否定できるかといえそうではない。明らかなフィクションや、籠城戦に関係のないエピソードを省いた時、全てを脚色と片付けることはできない、栗屋方から見た国吉籠城戦のリアルな実態が描写されていることも事実である。その一方で、対戦相手である朝倉方の記録、

他の文献資料、文献に記されない伝承、各地に残る所縁の文物、発掘調査の成果等とつき合わせていった時、国吉籠城戦の眞実・実像を知ることができるのである。

そのためにも、一方からのアプローチだけではなく、粟屋、朝倉双方の記録と研究成果の持ち寄りや、共同調査も実施していくことが今後必要になってくるであろう。